

---

# The Tune Of Stars

九条玖々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Tune Of Stars

### 【Nコード】

N2676N

### 【作者名】

九条玖々

### 【あらすじ】

喫茶店でアルバイトをし、一般的な大学生と左程変わらぬ生活を送っていた僕の人生をあらぬ方向へ分岐させたのは、おそらく「しやがみガードして」といきなり言っただけのけた Gosroji を着た少女との出会いであろう。

## 一章 幻影の城 『しゃがみガード』

時計は午後八時      僕がアルバイトしている喫茶店の閉店時間を指していた。

普段は店長も閉店時間までいるのだが、風邪を引いて寝込んだらしく、復帰するまで店をまかされていた。

正直、パートかアルバイトをもう一人くらい雇ってほしい。

客は窓際の奥の席に一人、頼んだコーヒーも飲まず、ただ外を眺めているだけの少女、一人だけであつた。

「お客様、閉店時間ですので、お会計をお願いしたいのですが……」  
見た目は高校生くらいだろうか。黒髪のショートヘアを指先で弄りながら、眠そうに外を眺めている。その目はカラコンでも入れているのだろうか、赤い色をしていた。正直言つて凄く美人である。少女の服装は黒を基調としたゴスロリで、それがまた少女の美貌を上手く引き立てている。

そんな絶世の美少女だが、どうやら僕の願いは無視されたいらしい。

これでは店を閉められない。

「あのー……お客様、聞いておられますか？」

………無反応。

無銭飲食ではなさそうだが、このまま居座られても困る。

いつそ警察に頼つてしまおうか……。

そんなことを思っていると、少女は急にこちらに目を合わせた。

そして彼女の言った言葉は、

「しゃがみガードして」

実に異常だった。

だが、そのレスポンスをする暇もなく彼女に足を払われ、僕は

呆気なくうつ伏せに倒された。

床に直撃した胸部に痛みが走る。

「いきなり、何を……！？」

……立てない。相当な力で頭を押さえ付けられているらしい。一体あの華奢な腕の何処にそんな力が？

……………！？

直後、窓硝子が壮大に割れた音がし、その破片が僕の見える範囲にまで飛び散ってきた。

日中に暖められた、温い風が店内に吹き込む。

どうなっているんだ！？ こんなこと……ありえないだろ！！

少女の手から解放され立ち上がると、目の前には真夏だというのに黒いトレンチコートに身を包んだ銀髪の白人が、不気味な笑みを浮かべ立っていた。

「何だよお前！！ 警察……を」

急に意識が薄れ、視界が真っ暗になった。

## 一章 幻影の城 『時給千円』

目覚めると、細長い蛍光灯の明かりがまず目に入った。

僕は片手でその光を遮りながら起き上がる。ソファアの上で眠っていた所為か、体が痛い。

目の前にはテーブル、その先には両脇を本棚に挟まれた形で、古びたブラウン管のテレビが置かれていて、その横には出入り口と思われるドアがあった。

……全く見覚えがない部屋に僕はいる。

「お、ようやくお目覚めか」

その声に反応して後ろを振り返ると、綺麗な赤色をしたセミロングの髪が印象的な、スーツ姿の女の人がコーヒーを持ってきた。

「僕の分のコーヒーを持ってきたってことは、僕が起きることを予め知っていたのではないのですか？」

彼女は一言それを肯定し、僕の前にコーヒーを置いた。

「自己紹介がまだだったな」

彼女は僕に名刺を手渡した。

それには星屑海屑子と書かれていた。ほしくみくすこ逆にそれ以外は何も書かれていなかった。真っ白である。

「ゴミ子と呼んでくれ」

……………。

とりあえず、僕も名乗った方がいいか。

「僕は」

「君の名前はとうに知っている」

「ゴミ子さんはそう言って、僕の言葉を遮った。」

「……予知能力でも持っているのですか？」

僕がそう言つと、案の定ゴミ子さんは大笑いした。

「傑作だなあ、おい。私にそんな大そうな能力があるわけないだろう?」

確かにそれも一理あるわけだが、何もそこまで笑わなくても……。  
「大笑いしたことだし、そろそろ本題に入ろうか。さて、君は何故ここにいると思う？」

何故って……。

アルバイト先の喫茶店で閉店処理を……。

あ……。

「すいません！ 今すぐバイト先に戻らないと……！」

何が起ったのかイマイチ理解できないが、店の鍵を閉めていないのは確かだ。これで泥棒にでも入られたら、いくらなんでも不味すぎる。

「心配はいらんよ。戸締りはした。硝子も元に戻しておいた。それにもうあれから三日も経っている」

硝子？

三日？

何がどうなっているんだ？

何で彼女が戸締りをしているんだ？

今にも頭がパンクしそうだ……。

「とりあえず、落ち付け。そして、よく思い出してみろ」

とりあえず深呼吸を数回し、心を落ち着かせる。

すると不思議なことに、すうーっと記憶が引き出された。

そこにはゴスロリを着た少女と黒いトレンチコートを纏った銀髪の男が対峙していた。

「これは……？」

「君は残念なことに、『魔術師』の戦争に巻き込まれたのだよ」

……魔術師？

それはあまりにも聞きなれていて、聞きなれない言葉だった。

「あの男は何処のどいつかは知らないが、彼女の方は知っている。むしろ、君をここまで連れてきたのは彼女だ」

あの少女が……僕を？

「……あの少女は？」

「彼女は蛙川憂子だ。今はないが、直にもう一度顔を合わせられるだろう」

今はないということは、あの少女　蛙川憂子はここに入出入りしているらしい。それも頻繁に。

「……あの、ともかくアルバイト先の店長に謝りに行かないと……」理由はどうあれ、三日も無断欠勤しているんだ。いくら店長が温厚な人だからと言っても、流石に怒っていないわけがない。

「ああ、その辺も大丈夫だ。とくに君のことなんざ忘れているさ。正確には　忘れてもらったと言った方がいいか」

胸ポケットから取り出したタバコを咥え、ゴミ子さんはそれに火を点けた。

「せつかくだから、うちで働いてもらうことにしたのさ。ちょうど人手も足らなかったとこだ」

「そんな勝手な」  
理不尽にもほどがある。

「君がここで働いてくれるのなら、それなりの報酬は出すつもりだ」この人たちに深く関わるのは、止めた方がいいのは確かだ。こういう場合は、逃げるのが得策だな。

「……考えさせて下さい」

僕はそれを口実にし、この部屋から出た。

ドアを挟んだすぐ先は螺旋階段になっていて、それを降りると、出口はすぐそこだった。

「ここは……」

外に出ると、そこは見覚えのある　いや、見慣れた場所だった。どうやら、駅前の商店街から少し離れたところに建つ、古びたビルに僕は今までいたらしい。

入口には『星屑海』と書かれた表札があった。

それにしてもゴミ子さんは、よくこんなところに住めるな……。

ともかく、他にアルバイトを探して、早く普通の生活に戻らなければ……。

僕はアルバイトの求人情報誌を入手する為、駅前にあるコンビニへ行く為に、商店街の方向へ歩き始める。

ここ、御崎町は半分が水田と畑である為、風景の殆どはそれである。

唯一、店舗が立ち並ぶ商店街も人は疎らで、近年言われている過疎化減少が覗える。

商店街を抜ければ町唯一の駅があり、その向かい側にコンビニがある。

商店街の店の殆どは、日中にも関わらずシャッターを下ろしている。不景気で経営が困難になったのか、単に老いて経営を続けられなくなったのかは、僕の知るところではないが、少し寂しさを覚えた。

僕はそんな商店街を足早に抜け、駅前のコンビニに入った。

えっと、情報誌は……。

僕は無料の情報誌が置いてあるコーナーからアルバイトの求人情報誌を探す。

だが、置いてあるのは賃貸情報誌のみで、残念ながらアルバイトの求人情報誌は一冊もなかった。

思えば、あの喫茶店もやっとの思いで探したんだっけ？

こんな町で独り暮らしを始めたのが悔やまれる。

「はあ……」

不意に溜息が漏れる。

このままでは光熱費や家賃はおろか、食費すらまともに払えない。やはり、ゴミ子さんのところで働く以外、手はないのか……。

僕は仕方なく、ゴミ子さんのビルへ戻ることにした。

「お帰り。案外早かったんだな」

ゴミ子さんは自分のデスクで新聞を広げていた。

「ここに戻ってきたということは、うちで働いてくれるということだろ？」

ゴミ子さんは新聞を畳み、契約書を僕の前まで持ってきた。

……千円ももらえるのか！？

確かに契約書には時給千円と書かれていた。  
その瞬間、僕の意志は固まった。

「ここで、働かせて下さい」

僕その言葉と同時に、ドアが開いた。

「……おはよう」

昨日の少女がここに入ってきた。

「ああ、おはよう憂子。そこにいる青年が、今日からここで働くことになった。色々と教えてやってくれ」

ビシッと親指を立て、雇い主は僕の教育を丸投げした。

「ああ、まだいたのね。私のことは呼び捨てでいいわ。私の方が年下だし」

今さっき僕を認識したような口調で、少女　憂子は僕にそう言った。

「……よろしく」

「では、挨拶も済んだし、早速仕事をしてきてもらおうか」  
パンパンと二回手を叩き、ゴミ子さんがそう言った。

「初仕事の内容は、とある廃ビルの内部調査だ。迅速に済ましてきてもらいたい」

根城にしているホームレスの実態調査でもするのだろうか？

ともかく、それくらいなら僕にもできそうだ。

「それと、これを廃ビルの中央に置いてきてくれ」

ゴミ子さんは僕に透明のビー玉を手渡した。

「ビー玉？」

ビー玉なんて何に使うのだろうか？

「それは保険だ。それと、こっちは君の護身用」

もう一つ、彼女は僕に柄に綺麗な蝶の装飾がなされたナイフを僕に手渡した。

それにしても、護身用にナイフだなんて、物騒だな。

そう思いながら、僕はナイフを懐にしまう。

「……行くわよ」

憂子と共に僕は、「三子さんのビルを後にした。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2676n/>

---

The Tune Of Stars

2010年10月8日14時33分発行